

ゼミナールの肖像 7: 井出野栄吉ゼミナールと準硬式野球部 一橋大学で過ごした 4 年間を振り返って

杉森 務

ENEOS ホールディングス株式会社 代表取締役会長(昭 54 商)

はじめに

私がこの「創立 150 年史準備室ニューズレター」への寄稿のお話をいただいたのは、昨年 6 月のこと。最初の緊急事態宣言は解除されたものの、コロナ禍が日常生活、そして経済にもたらした混乱は極めて大きく、それへの対応に日々慌ただしく過ごしていた頃であった。そのため、寄稿をお断りしようと考えたりもしたが、創立 150 年史準備室長を務めておられた大月康弘先生（現・副学長）からのレターに「日本製鉄・進藤孝生会長からのご紹介」との一文が入っていることに気づいた。進藤会長は一橋の大先輩であるだけでなく、ともに経団連副会長を務めている間柄。日頃から非常にお世話になっている進藤先輩からの紹介とあっては、選択肢は一つしかないと思い、お引き受けした次第である。

シリーズ「ゼミナールの肖像」—先輩方の玉稿を拝読して、少々気後れするところがあったことは否めない。というのも、私は学業で出色の成績を残すような優秀な学生だったわけではない。ゼミには真剣に取り組んだが、教授との間で深い絆を育んだわけではなく、特段のエピソードも持ち合わせていない（「覚えていない」と言った方が正確だろうか）。むしろ、クラブ活動やアルバイトに精を出し、友人達とよく酒を飲み、雀卓を囲む毎日を送っていたのが正直なところである。ただ、これはこれでよくある一橋の学生の姿だろうと、卒業生諸氏も共感してくれることを期待して、この機会に振り返ることにしたい。

一橋入学まで

私は石川県の出身である。1955 年に金沢市で生まれ、警察官の父の仕事の都合で何度も転校を経験したが、移った先はすべて石川県内で、以前在籍した学校に舞い戻ることもあった。高校は石川県立金沢泉丘高校に進学。旧制金沢一中以来の伝統ある進学校だったので、入学した頃から大学進学について考える機会が多かった。

志望大学を選ぶにあたり、「どの学部に入るか」であるとか、「どこにあるのか」が、大きな判断材料になることは、今も昔も変わらないと思う。もちろん、高校生の私もこの二つを基準にして、どの大学を受験するのか、あれこれ考えていた。

一つ目の「どの学部に入るか」については、ほとんどの人が将来自分の就きたい職業と照



らし合わせるのではないだろうか。当時の私が漠然と抱いていたのは、医学部志望というもの。小学校3年生の時に病気で半年ほど入院した経験があり、人の命を救う医者という職業に頼もしさを感じていた。ところが、物理が苦手ですぐにもならず、文系に進むことになったので、法学部や商学部を志望するようになり、憧れる職業も弁護士や公認会計士といった、いわゆる花形のサムライ業（士業）に変わっていった。

もう一つの「どこにあるのか」、すなわち大学の立地も私にとっては重要なクライテリオンだった。というのも、地方に生まれ育った若者のご多分に漏れず、私も東京に憧れ、東京の大学に入りたいと考えていたのだ。金沢は豊かな自然に囲まれた、伝統・文化が息づく素晴らしい土地ではあるが、閉鎖的・保守的な風土が強い地域でもあった。おまけに一年を通して雨や雪が多かったため、冬の重く低い空を仰ぎ見る度に「開放的で明るく」「抜けるような青空」とのイメージがあった東京に思いを馳せたものである。

こうした思いを巡らせているうちに高校3年生になり、さてどの大学を受けるか決めなければいけなくなった頃、父が一言名前を挙げたのが「一橋大学」。ここなら、学部、大学の場所ともに自分の志望を満たすことができる。国立大学なので親にかけられる経済的な負担も少ない。そう考えて受験を決意し、東京・御茶ノ水にある某予備校を経て、1975年の春、晴れて商学部入学を許可された。

一橋での学生生活

① 入学と前期・小平での生活

国立で挙行された入学式は華やかだった記憶がある。満開の桜に彩られた大学通り、欧州の庭園のようなキャンパス、そしてロマネスク建築の兼松講堂。「灰色」とも言われる受験生活を乗り越えてきた私にとって、この先の学生生活に大きな期待を膨らませるには十分な光景だった。だが、新入生にとって国立本校舎との付き合いは入学式くらいのもので、前期課程の二年間を過ごす小平校舎が新生活の中心となる。国立のような華やかさはないが、武蔵野の閑静な住宅街に佇む小平キャンパスはどこか素朴で、地方から出てきた私にとって居心地の良いものだった。

新入生のクラス分けは第二外国語の専攻に従ってなされ、私はドイツ語を選択した。クラスは確か「F5 クラス」だったと思う。ドイツ語はとても難しかった。ここで詳しく申し上げることはしないが、性別による名詞の区別（男性、女性、中性）をはじめ、文法にはとても苦労させられた。クラスメートの中には原書を読み漁る猛者もいたが、私は単位をとるのがやっとのレベルだった。

ドイツ語に限った話ではないが、最近、外国語を自在に操る人を見ると少々羨ましさを感じる。社会人となり、特に近年、海外出張など外国の方とコミュニケーションをとる機会が格段に増えた。相手の母国語を使って、片言ではないスムーズな会話ができたらどれほど豊かなことだろう。経済学とともにもっと勉強しておけばよかったと思う学問の一つである。



その一方で、1 学年時は語学の授業をはじめとしてクラス単位で動くことが多いことから、クラスは「友人をつくる場」として非常に有り難い存在だった。実際、私は 4 人のクラスメートと意気投合し、いつしか私を含む 5 人で行動を共にするようになった。卒業するまでの 4 年間、彼等と親しく付き合ったが、その中でも卒業後キッコーマンに就職した般若攝也(はんにゃ・せつや)とのエピソードは思い出深い。4 年生となった 1978 年 10 月 1 日、その日は当時の就職活動における面接解禁日であり、私は西新橋にある日本石油(現 ENEOS)の本社に行かなければならなかった。しかし、私は足指の骨折で松葉杖での生活を余儀なくされ、都心まで電車を乗り継いで行くことが難しい。般若は、そんな私の窮する姿を見かねて車で日本石油まで送ってくれたのだ。おかげで面接には間に合った上、松葉杖姿の悲壮感が印象に残ったのだろう、当時日本石油の人事担当常務で、後に社長・会長を務められた建内保興(たけうち・やすおき)さんにその場で内定をいただいた。般若は私にとって、言わば「恩人」であり、今でもゴルフや酒などで親しく付き合う仲である。

② クラブ活動

クラブ活動は、準硬式野球部に入部して 4 年間打ち込んだが、1 年生の頃はもう一つ、社交舞踏研究会(現・競技ダンス部)にも入った。きっかけは、入学して間もない頃に友人と練習をのぞきに行ったことである。津田塾大学や東京女子体育大学の女子学生が多くいて、その楽しそうな光景に惹かれて入会を即決した。

ところが、現実は甘くなかった。社交ダンスは、男女がペアとなって踊るものであることは言うまでもないが、入会してしばらくは、1 人で行う基礎練習ばかりだった。まずはホールド。男女が組んで踊る際に作る形のことだが、きれいに踊るためにはこのホールドがしっかりしていなければならない。腕の力だけでなく、上半身全体の筋力でホールドをつくる練習を何度も行った。ホールドの次は、競技種目ごとに異なるステップやウォーキングの練習、そして、あたかも相手と組んで踊っているかのように 1 人で踊るシャドーダンスを繰り返し、パートナーの女子学生と組んで踊れるようになるまでに数か月は要した。余談だが、パートナーは自分で選べるわけではなく、先輩に決められた。今はどうか分からないが、少なくとも当時はそうだった。

競技ダンスには、モダン種目だけでワルツ、タンゴ、スローフォックストロット、クイックステップの 4 種類のダンスがあり、それぞれきっちり体に覚えこませなければならない。また、パートナーとのバランスを取りながら一定時間踊り続けるため、体幹の強さと持久力も求められる。非常にハードなスポーツであるが故、パートナーを組んで踊るようになってからも汗まみれになり、涼やかなイメージとは程遠かった。ただ、厳しい練習の甲斐あって、1 年生が終わる頃に出場した国公立大戦のクイックステップ部門で 7 位に入賞することができた。

だが、そんな競技ダンスとは 1 年生限りで別れを告げることになる。平日は練習日が重な



らなかったために野球とダンスの両立が可能だったが、どちらのクラブも週末、特に日曜日に試合が入ることが多くなったため、準硬式野球部と社交舞踏研究会の双方からどちらか一方に絞るよう強く求められた。私は散々迷った挙句、野球を選んだ。

その準硬式野球部こそが、一橋で過ごした4年間所属したクラブである。文字通り「準硬式球」を使用するのだが、この準硬式球は、表面が軟式球と同じゴム製ながら、中身が硬式球の構造を持つ。そのため、打った感覚や打球の軌道・跳ね方は硬式球に近く、バットやグローブなどの道具も硬式野球と同じものを使う。プロ野球や社会人野球、高校野球などで馴染みのある硬式野球、あるいは少年野球から草野球まで幅広い層の人々がプレーする軟式野球と比べると知名度こそ高くないが、大学野球の世界ではプレゼンスが高く、全国の大学には350前後の準硬式野球部があるという。一橋大学の準硬式野球部も戦後まもなく発足した東都大学準硬式野球連盟に初期から参加しており、現在まで70年余の歴史を誇っている。

金沢で過ごした時分、私は中学まで野球に打ち込んだが、高校では、受験勉強のことも考えて野球部に入らなかった。そのため、大学でのクラブ活動は野球がしたいと強く思っていた。加えて、一橋の硬式野球部は毎日練習があつてクラブ活動以外に時間を割くことが難しいこと、その一方で軟式野球は同好会組織だったので公式戦がなく物足りなさを感じたこと、これら2つの理由もあつて、私は準硬式野球部への入部を決めた。もちろん、先述の通りボールの特徴が硬式球に近いことも準硬式野球部を選んだ理由の一つである。

練習は月、水、土の週3回小平グラウンドで行われ、練習後は着替えて近くの雀荘に直行するのが常だった。準硬式野球部員だけで2つか3つの卓を囲むことが多く、その都度、「1部リーグ」「2部リーグ」などと称して覇を競ったものである。日曜日はたいてい対外試合が入っていた。東都リーグのリーグ戦が春と秋に開催されたが、当時は3部か4部に所属していたのではないか。その他、国公立大戦や三商大戦など、他の運動部と同じような公式戦があつたと記憶している。

ポジションは内野手でショートを守ることが多かった。フィールディングと捕球は上手い方だったが、送球に難があり、名手とまでは言えなかった。この点について、自分では「子供の頃から強肩で鳴らしたが故のこと」と思うことにしている。打撃もまずまずで、1番から9番まで様々な打順で試合に出た。最大の殊勲は、2年生時の国公立大学戦・新人戦で7打席連続安打を記録したことである。

準硬式野球部には自分を含めて7人の同級生が所属していた。就職先は銀行やメーカー、商社など、おおよそ一橋生と変わりはないが、私と同業の石油会社に就職した者、さらには東海地方の某市で市長をしている者もいる。ここ数年はスケジュールが合わずにOB総会など部の会合に出席できていないが、時間を見つけて旧友に会って昔話をしたいものだと考えている。



③ アルバイト

アルバイトにも精を出した。人並みに家庭教師もやったが、印象に残っているものは、卒業まで続けた居酒屋でのアルバイトである。当時、私が住んでいたのは国分寺市東元町。国分寺駅南口から徒歩5～6分のアパートだったが、仲間内で学校から一番近くに住んでいたこともあり、たまり場になっていた。そのため、国分寺駅とアパートとの間にあった喫茶店に皆で入り浸ったが、ある日、その店が和食居酒屋に改装することになった。ただオーナーの悩みは、居酒屋商売の経験がないばかりか、酒もまったく飲めないこと。店を手伝ってほしいと言われた私は、オープンと同時にこの居酒屋にアルバイトとして入ることを決めた。

店では接客はもちろんのこと、メニュー作りや価格設定にも携わった。厨房にも入って、しめじバターやじゃがいもピザなど様々な料理を作った。お客さんは常連さんが多く、接客中に親しく話をさせてもらったりした。店の2階には20人前後で貸し切りができる部屋があり、亜細亜大学や武蔵野美術大学、東京経済大学など近隣の大学生の宴会がよく入って忙しかった記憶がある。

店の名前は「惹凱牡（じゃがいも）」。卒業後、私は飲食業に進まなかったが、接客商売や様々な年齢層のお客様との人脈づくりに貴重な経験を積みさせてもらったことは間違いない。

後期課程（3・4年生）におけるゼミナール活動

後期課程への進学とともに国立キャンパスに移るのだが、私にとって、国立での学生生活は、ゼミナール活動だけといってもいいようなものだった。クラブ活動は小平、自宅とアルバイトは国分寺だったので、生活の中心は1年生・2年生の頃とあまり変わらず、国立に移ることについて、たいていの一橋生が感じるような喜びやワクワク感を持つまでには至らなかった。

ゼミを選択する頃、私はエネルギーについて研究するゼミに入りたいと考えていた。エネルギーは言うまでもなく、国民生活や経済活動の根幹をなす重要なインフラであり、そのスケールの大きさに惹かれていたのだ。また、その数年前に起こった第一次石油危機を経験したこともあって、わが国のエネルギー供給の脆弱性に触れたことも関心を強めた所以だろう。商学部の中で調べると、井出野栄吉先生が担当する「エネルギー商品」というゼミがあったので、迷わず門を叩いた。名称は「商品」だが、商品学という学問分野である。

ここで、一橋における商品学の歴史を紐解いておきたい。商品学は欧州とりわけドイツを中心に発展した学問だが、一橋は早くからこれを取り入れてきた経緯がある。本学の源流である商法講習所には、1880年（明治13年）に「物産誌」という名称の科目が存在した。ここでは、天然・人造を問わず、国内外の広範な商用の物産について論じられており、商品学の胎動を感じることができる。その後、東京商業学校と称していた1886年（明治19年）には化学専攻の理学士・石川巖氏によって「商品」の名称の下、商品学の講義が開始された。



これが日本における商品学の最初の講義とされている。以降、国の発展ならびに国内外の商取引の拡大に伴って商品の種類が増え、且つそれら個々の商品知識も深められた結果、1920年（大正9年）の大学昇格時（東京商業大学）から商品学講座は二つに分化。繊維や食料品など動植物系商品を扱う「商品（第一）」と、肥料や鉱物資源など化学系の商品を扱う「商品（第二）」の二つの講座が設置され、複数の教官が商品学の講義を担当することになった。

その後、戦中・戦後に至るまで商品学の二講座体制は維持され、1949年（昭和24年）の新制大学発足時には、「化学商品（当時の名称は『商品学第一』）」と「繊維商品（当時の名称は『商品学第二』）」の二つのカテゴリーが確立された。そして繊維商品の廃止に伴い、1961年（昭和36年）には「エネルギー商品」の講義が開始され、1968年（昭和43年）から井出野栄吉先生がこれを担当された。

商品学は、商学部の科目でありながら、学際的な色彩が強い。欧州の源流がそうだったためかもしれないが、商品の原料や製法、性質の分析に力点を置いた自然科学的アプローチがベースにあるため、一橋でも理学士・工学士といったいわゆる「理系」の教官が代々商品学の講義を担ってきた。こうした自然科学的な知識に加えて、商品の産地や用途、需要、取引の慣習など社会科学的な分析を加え、商品の成り立ちや在り様を研究する姿勢が貫かれている所が商品学の特徴と言っている。

実際、井出野先生も理学博士であったが、石油や石炭といった化石燃料や、当時国策として脚光を浴びていた原子力などについて、技術的側面だけでなく、それぞれが持つ経済的・政治的な側面にも考察を加えられ、これらエネルギー商品がどのように発生・成長し、やがて成熟していくのかについて詳らかにすることに心を砕かれていた印象がある。

さて、私が所属した当時のゼミに話を戻すと、同期のゼミテンは自分を含めて7、8人だったと記憶している。各人が毎週代わる代わるプレゼンターを務めるディスカッション形式で、プレゼンターは自分が興味を持ったテーマを自由に選んで調べ上げ、ゼミに臨む。一橋のゼミナールといえば、概ねこのような進め方が主流だとは思いますが、自分が関心を持って取り組んだ個別のテーマについて、先生から直接いただくフィードバックは、講義とは違って非常に勉強になったし、刺激にもなった。何より、双方向で意見を戦わせるスタイルは新鮮だったし、実際やっていて楽しかった。

4年生になると卒論の作成に取り掛かった。テーマはいろいろ思案した末、ポスト石油を考えた「2000年のエネルギー」にした。

人類とエネルギーの関わりについて近世まで遡ってみよう。18世紀の産業革命期に木炭から石炭へのエネルギー転換が起こり、石炭を利用した蒸気機関が工場の動力源のほか、機関車や船舶のような大規模輸送機械にも応用されて、欧米諸国をはじめとする先進国の発展を後押しした。その後、第二次世界大戦後の20世紀半ば過ぎに中東やアフリカなどで大規模な油田が相次いで発見されたことを契機として、エネルギーの主役は石炭から石油へと移った。石油は、輸送・貯蔵等の面で扱いやすく、かつ、価格も低廉であったため、内燃



機関（すなわちエンジン）や暖房用の燃料のほか、化学製品の原料としても広く利用され、産業の著しい高度化をもたらし、人々の生活を大きく変えた。わが国でも石油が戦後の復興・高度成長を支える原動力となったことは周知の事実である。

こうした過去のエネルギー転換の流れを踏まえれば、2000 年を迎える頃には、かつての石炭のように石油もいずれ主役の座を追い落とされて、エネルギーを巡る風景も大きく変わるかもしれない。当時の私はそう考えた。

それでは、石油に代わるエネルギーの主役は何か？私が考えたものは核融合だった。詳しい説明は割愛させていただくが、軽い原子核同士が融合して別の原子核に変わる際に大きなエネルギーを出す現象が核融合である。原子力発電で用いられる核分裂と言葉は似ているが、こちらはウラン燃料を用いて原子核を分裂させるものであるため、原理的に異なる。核融合の代表例は太陽である。太陽の中心では、水素が核融合反応を起こしてヘリウムになり、それと同時にとてつもなく大きな光と熱を放出している。このような膨大なエネルギー量に加えて、核融合に使う重水素や三重水素は海水からほぼ無尽蔵にとることができるし、CO₂を排出しない。まさにエネルギーとしての魅力が詰まった核融合こそが、将来のエネルギーになると考えたのだ。

周知の通り、核融合が卒論通りに 2000 年に主役の座につくことはなかったが、私が卒論を書き上げた 1979 年以降も、核融合は言わば「地上の太陽」として期待を集め、その研究は今日まで続けられてきている。しかし、非常に息の長い話のようで、人々の暮らしや社会を支えるエネルギーとして普及するとしたら、今世紀末ぐらいになるのではないかと言われている。

就職

4 年生は就職活動の時期でもあった。高校時代は会計士や弁護士に憧れたと先述したが、大学生活を経て、すっかり民間企業志望に変わっていた。私はエネルギー、とりわけ石油に携わる仕事がしたいと考えていたため、業界最大手の日本石油への入社を決めた。

一次エネルギーに占める石油の割合は、今でこそ 4 割弱だが、当時は 7 割以上を占めていた。そんな重要な戦略物資の供給をこの手で担いたいと考えたことが志望理由だった。また、卒論作成によって頭をもたげた「エネルギー転換」に対する問題意識もこの決断に影響した。巷では「石油 30 年枯渇説」なるものが叫ばれるようになり、エネルギーの大宗を占める石油があと 30 年持たないのではないかと、次のエネルギーが必要なのではないかと、との危機意識が醸成されつつあった頃である。これからのエネルギー転換は石油会社を中心になって進めていくはずであり、自分もその中に身を置いて、エネルギー転換の当事者になりたい。そのように考えたのだ。



おわりに

大学入学前から就職するまでを振り返ってきたが、最後に一橋で得たものについて、私の考えを申し述べたい。

ゼミ活動については、井出野栄吉先生が担当するエネルギー商品のゼミに所属したことが、私を石油の世界にいざなってくれたことは間違いない。そして2000年には起きなかったエネルギー革命が、今まさに地球温暖化対策に対する要請が強まる中、再生可能エネルギーや水素、カーボンリサイクル等、クリーンエネルギーへの転換という形で華々しく進行している。このエネルギー革命にやりがいを感じて向き合うことができるのも、一橋大学と井出野ゼミで学んだおかげだと思っている。

ただ、私が何より価値を見出していることは、コミュニケーションのスキルが大いに磨かれたことである。かみ砕いて言えば「相手の話をきちんと理解して、その上で自分の考えを正確かつ論理的に伝えること」。一見簡単に聞こえるが、これを実践することは難しい。

石油業界は自由化と合従連衡の歴史と言っても過言ではない。私もその当事者として、利害が異なる相手との折衝を重ねてきたが、その都度うまく乗り切れたのは、一橋で培ったコミュニケーションスキルに負うところが大きい。少人数制のゼミだからこそ、教授と学生、あるいは学生同士の距離が近く、密度の濃いコミュニケーションの機会に恵まれている。小ぢんまりした一橋ならではの良さなのだろう。

また、小ぢんまりしているせいか、一橋は人間関係がよいと、常々思っている。これはゼミに限った話ではない。会社の内外、先輩・後輩を問わず同窓生がいるとすぐに打ち解けることができるので、それだけで頼もしい。「実学重視」と言われる通り、一橋の強みは、やはり企業人を育成・輩出するところだと改めて感じる次第である。

少子化・人口減少の進行に伴い、国内のみならず国境を越えた人材獲得競争が、今後一層激しくなることが見込まれる。また「デジタル」や「グリーン」といったキーワードとともに、経済社会も目まぐるしく変化していくことだろう。そのような環境にあって、母校には、「小ぢんまり」しているからこそその良さを堅持しつつ、優れた人材を育成してもらいたいと期待している。

